



発行者
文京学院大学
女子中学校
南部 和彦

「入学おめでとう号」として、入学式で誓いの言葉を担当した生徒の入学式の感想と、中学作文コンクール入賞作品の紹介をいたします。

入学式を終えて

一年栗組 大槻 遥花

私は、入学式で「誓いの言葉」を務めました。入学式当日に「誓いの言葉」が終わるまでには気持ちの変化がありました。

最初に、「誓いの言葉」を入学式で読むというお話をいただいたときは驚きました。同時に、すごく嬉しかったので、ぜひやりたいと思いました。そして、どんな内容を話すのか、わくわくしました。しかし、詳しい話を聞きに学校に行つたときに、原稿の内容を自分で考えなくてはいけないことを知り、わくわくが不安に変わりました。

帰宅して、季節の言葉から考え始めました。私は、すぐに、生徒の明るい表情と、入学式はこんな風であって欲しいという春のイメージが思い浮かび、勇気が出てきました。季節の言葉の後には、文京学院に進学するきっかけとなった、長年続けている新体操の目標を書き、自分の意志を述べました。書き進めているうちに、自分の目標を達成するためには、何が必要で、何が大切かを、再認識しました。それは、創立者の島田依史子先生が「卒業する時にこんなふうであって欲しい」という思いを込めた校訓を実践することが、やっぱり一番大切なのだという事です。

文章が完成すると、音読の練習を始めました。本当は、音読の練習は苦手、好きではありません。でも、最後までやり遂げなくてははいけないと思ひ、頑張りました。

そして、本番。練習した結果がだせるように、丁寧に注意されたところに気を付けて、書いたときの気持ち思いだして読みました。すごく緊張していたのか、身体が熱くなるのを感じました。のどが渇

いて、ライトがともまぶしかったことも覚えています。また、「誓いの言葉」を読むにあたり、小学校の時には習わなかった、美しい女性らしい礼の仕方も教えて頂きました。

私は、「誓いの言葉」を読むことを通して、文京学院大学女子中学校の一員としての第一歩を踏み出すことができました。そのことをとても嬉しく思っています。

二十七年度 作文コンクール

- 一位 三年松組 竹内真希 「悔しかった全国大会」
- 一位 二年栗組 辰野加奈 「左利き」

入賞者紹介

- 三年菊組 戸田真由美 「吹奏楽部に入つて学んだこと」
- 三年桃組 岩野安杜己 「私にとつての剣道」
- 三年松組 伊藤由唯 「人の気持ちを考える」
- 二年菊組 菅沼美音 「アニメ・漫画」
- 二年菊組 成田彩葉 「戦後70年の時を経て」
- 二年桃組 佐竹希今日 「桃とブドウの危機」

一位の作品を掲載します。

悔しかった全国大会

三年松組 竹内 真希

試合終了のホイッスルの音が鳴り響く。「終わつた……」と心の中でつぶやいた。そのとたん、涙が後から後から流れてきて、とめることができなかった。今年の夏のバレーボール全国大会は、終わった。私は小学一年生からバレーボールを始めた。初めはボールで遊ぶことが楽しくて仕方なかった。それからもつともつと上手になりたいと思った。そのためたくさん練習をしてコートにたてるようになっていった。ユニホームを着られるようになっていった。一試合でも多く勝ちたいと思ひがんばって練習した。そして、もつと強くなつて日本一になりたいと思ひ、私は文京学院大学女子中学校バレーボール部に入部した。

文京学院のバレー部は毎年夏に全国大会に出場できるほどのチームだ。そこで、レギュラーになることはとても難しい。だけど私はユニホームを着てコートに出て、試合に出る事を決してあきらめたくない。

今の私はほとんどが応援やボール拾いなどで全く試合に出ることはない。だから、時々、自分はこのチームに必要なかが分からなくなる時がある。その時はとても辛くなるが、最後には負けたくないと思ひ練習を一杯がんばるのだ。そうやってがんばつていくことで、必ずいつかはコートに立てると信じている。

今年の全国大会は、ユニホームを着ることはなかったけれども、たくさんの感動を味わえた。みんなたくさん練習してきたこと、つらい思いをして泣いたこと、ケンカしたこと、私が人に嫌なことをしてしまったこともあったと思う。色々なことを思い出しながら、全国大会に向かった。結果はベスト8で終わってしまったけれども、私は先輩にたくさんのことを教えてもらいました。そして全国大会に連れて行つてくれた先輩たちに感謝の気持ちでいっぱいです。だから、私が先輩たちに教えてもらったことを、後輩たちに教えることができたらいいなと思つている。

今年の全国大会には、私は出られなくてくやしい思いをした。そのくやしい思いをした分、後輩たちにはしっかりと教えて、最高のチームを作りたいと思つている。今の私の実力ではレギュラーになれないし、ユニホームも着られない。レギュラーになるために、ユニホームを着るために、もつと努力をして自分を磨きたい。そして、絶対にコートの中に入りたい。そして、日本一になりたい。悔しい思ひはしたくない。

だから、日々の練習をがんばつていこう。そして、全国大会で日本一になり、笑顔で終わりたい。

左利き

二年栗組 辰野 加奈

「よく左で字が書けるね。」
初対面の人によく言われる。

私は左利きだ。さいきんでは、テレビで「左利き男子」ともてはやされたり、自分自身もうらやましがられたりする。だが、左利きはそんなに甘くない。左利きの不便なところは、数え切れないほどあるのだから。

一番代表的なのは、「腕がぶつかる」ことだ。右利きの人と並んで食事をしたりしていると、よく腕がぶつかってしまうのだ。「腕が当たらないように」

と、ずっと気をつかうのはもうこりこり。もつともこれを逃れる方法はひとつある。それは、「一番左端に座ること」。せめてこれだけはしておきたい。そしてまた、強敵なのは「横書きで字を書く時」。なぜこれが強敵なのかというと、手が黒くなるからだ。横書きは、左から右に書いていく。左手の場合、自分の手は筆記用具の左側にあるからインクや鉛筆が手についてしまうのだ。書いたら、手が黒くなる。手が黒くなつたら、紙が黒くなる。紙が黒くなつたら、また手が黒くなる。その繰り返しだ。大事な書類は、特に注意しなければならぬ。

レストランにもある。問題なのは、スूपバーだ。スूपバーのお玉は結構辛いのだ。スूपバーのお玉は、注ぎ口が右手で持ったときに注ぎやすい形になっている。スूपを注ぐこと自体がそこそこ難しいのに、左の人にとってはさらに難しい。初めてあのお玉を見たとき、「ここにも左利きの壁が……」と、少し、左利きが嫌いになったことを覚えている。駅にもある。右利きの人はあまり気づいていないかもしれないが、左利きの人が悩まされている所。それは、改札口のスイカをタッチする所だ。タッチする所は、通路の右側にあり、左手でタッチするのは難しい。毎日使う電車だからこそ辛い。自分はいちいち、いつも右手でやっていると、「たまには左手で簡単にやりたいなあ」と思う。そんなことが、しばしば。

そんな悲しい左利きだが、便利なこともいくつかある。例えば、左利きは、縦書きで字を書く時には手が黒くならないこと。縦書きというものは、日本だからこそよく使うと思う。左利きの日本人からしてみれば、縦書きは好都合だと思ひ。

もう一つ便利なことは、左利きの人は、右手も少しくらい使えるという人が多いということだ。右手向きにつくられている世の中で生きていくのだから、少しくらい使えないと不便というものだ。私は両利きになりたいと思つている。なぜか、なぜなら便利だから。左利きは、本当に、ほんとうに不便だ。でも、世の中は右利き社会。だからこそ、両利きになれる可能性は右ききより圧倒的に高い。その点では、両利きになりたいと思つている私にとって、左利きというものはとても好都合なのだ。

だから、これからは「左利き」ということをもつと生かして、楽しんでいこうと思ひ。

※「たけのこ」は本校HPでも見ることが出来ます。HPトップ画面【文女-あやめ】をクリックし、次の画面左側下から3番目【→たけのこ】をクリックしてください。